

氏名	馬 定延			
ヨミガナ	マ ジョンヨン			
学位の種類	博士（映像メディア学）			
学位記番号	映博第3号			
学位授与年月日	平成23年3月25日			
学位論文等題目	〈論文〉 日本におけるメディアアートの形成と発展			
論文等審査委員				
（主査）	東京芸術大学	教授	（映像研究科）	藤幡 正樹
（論文第1副査）	東京芸術大学	教授	（映像研究科）	桂 英史
（副査）	東京芸術大学	教授	（映像研究科）	岡本 美津子
（副査）	東京大学大学院	教授		吉見 俊哉
（副査）	武蔵野美術大学	准教授		クリストフ・シャルル

（論文内容の要旨）

本論文は、メディアアートを、環境としてのテクノロジーの発達に伴う複合的な社会現象として、そして、その現象に対するアーティストの取り組み方として定義している。この開かれた定義によって、研究対象としてのメディアアートの歴史を、海外から輸入された現代アートのマイナーなジャンルという狭い文脈から解放させ、日本現代史の中に確実に位置づけることが可能になるのである。一般的な芸術史において重視される個別の作家や作品ではなく、それらの背景を成す時代像に焦点を当てた本研究は、当時をめぐる記録と記憶を編み直すことで、メディアアートが歩んできた時間を描いていく。

全体の構成は以下の通りである。序論では、研究対象と先行研究を紹介した上で、本論文の方向性を明らかにする。第1章では、1970年大阪万国博覧会を前後して、戦後日本社会において、前衛芸術という思想がコミュニケーションの方法論として展開されていく過程を、起原としての実験として記述する。第2章が、情報美学と初期コンピュータアートから1980年代のCGまで、アートにおけるコンピュータの存在意義を記述することに対して、それに続く第3章は、科学技術立国政策とメイド・イン・ジャパンで代弁される経済社会的状況が、テクノロジーを用いたアート分野に及ぼした影響を指摘する。メディアアートの連続性が強調される第4章では、名古屋国際ビエンナーレARTECを中心に、1980年代と1990年代が接続されていく文脈を提示する。最後に、西武・セゾン文化、ARTLAB、ICCを取り上げる第5章は、情報社会に相応しい情報芸術としてのメディアアートが、大学教育システムの中で領域横断的に展開していく過程を記述する。最後に結論は「夢の系譜」として全体の議論を結ぶ。

新しい未来を夢見る人たちによって主導されてきたものの、アートとその環境としてのテクノロジーとの関係は、現実的にはアーティストたちと国や企業との関わりにならざるを得なかった。国や公との関係は徐々に縮小されていく反面、個人やグループを対象とする技術的、経済的支援から始まった企業との関係は、高度成長期を経て、2000年まで拡張されていく様相を呈していく中、希望的なのは、この「夢の系譜」の遺産が、人的資源として残り、そして教育システムの変化を通して拡散されていくことで、2000年代の新しい流れを形成していったという事実である。

(論文審査結果の要旨)

本研究は、近年の日本のメディアアートの特異性に注目し、60年代から現代までの文献調査から、関係者へのインタビューを行い、メディアアート作品出現の背景を見事なまでに活写した、いわば地域芸術の社会学的研究である。

最新の芸術分野を扱う従来型芸術研究の多くが、作家や作品を歴史的な出現順序に並べるだけの作家論や作品論に陥るケースが多く、新たな芸術論の創成に至っていないケースが多い。そのような落とし穴に陥ることを避けるために、著者はそれらの作品出現の背景となる時代背景、当時の現象や社会構造を丹念な文献調査によって積み上げ、おおよそ70年代の国と作家の関係、80年代の企業と作家、90年代を大学等の教育組織と作家の関係といった時代図式を設定し研究を行った。また、当事者である作家、キュレーター、ジャーナリスト、プロデューサー等に対して、独自のインタビューを行い、新たな事実を追加検証しながら、緻密な一次資料を作成した。

研究対象として、「アートとテクノロジーの融合」という一見幸福な構図では、メディアアートは解釈しきれないとし、アメリカ主導で進められてきた日本の戦後社会における科学技術の発達、日本のメディアアートの土壌を作り出していることを指摘し、メディアアートと国や企業との関係について特別に注目し研究を行った。

研究手法として、メディアアートが、批評とアートマーケットという「現代アートの」システムから排除されているという立場から、メディアアートを新しいアートの潮流やジャンルとして考え、既存の美術史の手法を使うことが有効でないとし、メディアアートとは、環境化した技術メディアの発達にともなう社会現象であり、それに対するアーティストの取り組みと考える立場から、これを現代史的なパースペクティブから扱っている。

しかしながら、前景となる個々の作家や作品と背景となる時代や現象は、複雑な相互作用を成しており、背景だけを描くことは不可能であるが、収集した資料をもとにして、できるかぎり事実を積み上げることで、それらに関係性の糸を貼り直すことで時代の流れの中にある現象を描き出すことに、みごとに成功している。

著者は、こうした背景を徹底的に描くことで、最終的にそこに浮かんでくる空白部分が、メディアアートの本質なのではないかという問いかけを行っている。本研究は、これまでも、書かれなくてはならなかったにも関わらず、これまで日本の研究者によってさえ書かれることの無かった、日本のメディアアートの形成を明かした極めて重要な論文と言わざるを得ない。著者は博士(映像メディア学)の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。